

## 教育現場における「イメージ奏法」

—— ピアノ演奏法から教育法への展開 ——

企画・提唱者・発表者：武本京子（愛知教育大学）

市橋奈々（愛知教育大学大学院生） 佐野美咲（愛知教育大学大学院生）

安田実央（愛知教育大学大学院生） 松川侑里香（愛知教育大学大学院生）

山本紗友理（愛知教育大学大学院生）

指定討論者：村尾忠廣（帝塚山学園大学・愛知教育大学名誉教授）

司会：国府華子（愛知教育大学）

### 1. 「イメージ奏法」の教育法への展開

武本京子

#### 1) 「イメージ奏法」とは

武本京子が考案し、展開させたピアノ演奏法・教育法で、楽曲を「言葉」、「色」、「表現曲線」、「映像」などで視覚化し、音楽構造や感情を「イメージ」として表現する。そのイメージ化の過程が「演奏法」に結びつくことで、独創的な教育法になっている。

#### 2) 「イメージ奏法」の展開—ICT活用による対話・討論型授業（アクティブ・ラーニング）—

「イメージ奏法」では、主体的な学びを実践するために「演奏設計図」を作成する。この「設計図」が自分の表現したい世界を具体化した「イメージ楽譜」である。作成にあたってはスマートフォンなどのICT機器を活用し、これをスクリーンで投影し、受講生が各自のイメージを共有できるようにしている。これによって、討論しながら奏法を検討することが可能となった。ICT活用のアクティブ・ラーニングの対話・討論型授業と言ってよいだろう。ピアノ演奏の授業では、学生が自分の考えやイメージを発表し、討論するという事は難しい。しかし、ICTを活用した「イメージ奏法」の授業では、自分のイメージを発表していくことや、討論していくことが可能となる。ピアノの授業であっても、自分と他の人との違いや共通点を見出しながら、人の演奏

の良さを認め、自分の個性を発揮していくべきではないか。音楽表現を主体的に考え、言葉や演奏で対話しながら、音楽能力の育成を図ること、それは人間の汎用的能力の向上と教師としての資質向上を目指すことになっている。

#### 3) 教育現場での演奏法から教育法への展開

本来、演奏家は無意識に様々な目に見えない世界を想像したり、感じたりしながら演奏している。

「イメージ奏法」では、無意識におこなっていることを、より具体的に視覚化することにより、何どのように表現したいかということを明確に意識させる。この意識的「演奏法習得の過程」で、個性、想像力、コミュニケーション力、ネットワーク能力などの「人間力」を学ぶのである。人と関わること、コミュニケーションをすることが教育の中で大切であり「イメージ奏法」は、それを気付かせていき自分らしさを出す、今までのピアノ実技指導とは違う教育を可能にしている。

### 2. 大学院生の「イメージ奏法」による実践

#### 1) 詩の中の複雑な感情と自分の合体—ショパン：

##### 《バラード第3番》の楽曲分析の考察—

ミツケヴィッチの詩『バラードとロマンス』の中《ジビデピアンカ＝水の精》による詩を「イメージ奏法」により主題ごとに照らし合わせながら

分析を行い、音楽の中にある愛の切なさや怖さを表現するための奏法を研究した。楽譜に揺れる心を表現する色を塗ることにより感情が視覚化され、複雑な人間の感情を表現しやすく自分を反映しやすくなった。

(市橋 奈々)

## 2) ピアノ編曲により伝えたいこと—リスト＝グノー歌劇《ファウストワルツ》の考察—

リストは自身の作品のみならず編曲作品も多く残した。なぜリストが歌劇をピアノ編曲したのかを「イメージ奏法」を通して探った。ピアノ編曲によりオーケストラのような響き、繊細な音色や重々しい音色など様々な表現をピアノ演奏でも可能にし、表現方法やタッチについても考えることができた。

(佐野 美咲)

## 3) 標題音楽における超絶技巧の詩的性と表現方法—リスト：《巡礼の年第2年イタリアより「ダンテを読んで」》に関する考察—

リストは、「ピアノの魔術師」と呼ばれる通り、超絶的な技巧を持つ当時最高のピアニストであり、また演奏に際し超絶技巧を要する作曲家でもある。このように、リストの楽曲を演奏する際は「超絶技巧」の追求に終始しがちだが、表題というヒントから、「イメージ奏法」を通し、イメージを膨らませ具体化することで、詩的な表現の可能性について探った。

本発表では、「イメージグラフ」や「演奏設計図」を提示し、奏法の解説をした。(松川 侑里香)

## 4) 宗教的哲学理念と音楽の結合—スクリャービン：《ピアノソナタ第9番Op. 68》の考察—

ピアノソナタ第9番を「イメージ奏法」にて分析した結果、「宗教的哲学理念と音楽の結合」の意図は聴き手を神秘の世界へ没我させる倦怠を伴った響きに見受けられ、自身の価値を崇高な世界へと求めたスクリャービンの難解な精神世界を読み解くことができた。今回の発表ではスクリャービンの芸術観に基づいた多彩な響きを追究する可能性について述

べ、「イメージ奏法」から導き出された具体的奏法の実践による解説を行った。また教育現場での活用により、技術だけにとらわれがちな子どもも、枠組みから内面に目を向けさせることで音楽教育の本質に近づくことができることを示した。(安田 実央)

## 5) ソヴィエト社会主義文化統制下の作品に伏せられた思い—プロコフィエフ：《ピアノソナタ第6番》楽曲分析の考察—

プロコフィエフの作品は、冷笑的、重厚、連続的な不協和音、機械的な連打、抒情的で不安定な旋律が、どこか戦争を想起させる。「イメージ奏法」による楽曲分析をおこなったことで、表面的な音楽表現の裏に、冷笑的かつ諧謔的な面も持ち合わせており、音楽全体を通して二面性があることがわかった。ピアノソナタ6番を社会情勢から考察することで、楽曲の中にある叙事的な戦争の様子と、叙情的な個人の悲しみや苦しみを推察した。(山本 紗友理)

## 3. 討 論

村尾忠廣会員(帝塚山大学)より、主に表現主義の楽曲の発表だったが、形式音楽の楽曲でどのように適応できるのか、との質問があった。それに対し、発表者は、学部1年より、バッハ、古典派、ロマン派、現代の作品を取り上げ、段階を踏み授業の中で展開していること、古典派の作品は、かえって「イメージ奏法」を適応しやすいと回答した。

フロアからは、タッチはイメージからどのように導くのか、との質問があった。それに対し、発表者は、イメージをした時の体の状態や気の流れなどから腕、体の使い方を導くとの説明を行った。また「イメージ奏法」を小学校の現場でもぜひ取り入れていきたいという意見や、実際に取り入れている教師が事例の紹介を行い、子どもとのコミュニケーションを取りやすくなったとの報告があった。

文責：武本 京子(愛知教育大学)